

万葉の川心

横浜市立矢向小学校教諭 澤井園子

物に寄せて思を陳べたる歌

(巻第十二 三〇二四番歌)

妹が目を 見まくほり江の さざれ波
重きて 恋ひつつありと告げこそ

羈旅に思を発せる歌

(巻第十二 三二七三番歌)

松浦船 さわく堀江の 水脈早み

楫取る間なく 思ほゆるかも

水は静かに流れ、川辺には常に風が吹いている。ひとりそれを見つめながら、じつとしているものなど何も無いのだと思う。空気の冷たさに無言で耐えている木々でさえ、その内には春への準備に余念がない。梅は花開いてうぐいすを呼び、桜の枝々は茶色の中に淡いピンクを入れている。一番寒い季節に春は立つ。人はどうなのだろうか。一番辛い時期に、もう体の中では次への準備をしているのだろうか。とてもそんなふうには感じられない。川底に息を潜める魚のように、ただ時が癒してくれないかと待っている。ある朝目が覚めたらすつきりすべてが解決し、新しい何かが始まればと願いつつ、現実には風邪の終わりのようにいつまでもぐずぐずとして変わらないのだ。いや、とりわけ大きな不幸に見舞われたわけではないのだが、ちよつと体に痛いところができるだけで気が滅入りがちになる。そこに寒さが加わるとかなりへこむ。自然に比べて人は弱いとつくづく思うのは歳のせいかな、季節のせいかな・・・。



大阪 天満橋から中之島を望む

難波堀江は恋の川。小唄のように現代語訳したくなる。「妻の目をずつと見たい、見たいと欲するほの字のほり川、立つさざ波のしきしきり、恋していると告げてほしいよ。」松浦の、船が進むよ波騒ぐ、堀江の水脈早いとて、しきりしきりに梶を取る。合間もないほど梶を取る。それのようにずつとあなたが慕われる。」さざ波にも船にも恋心が映し出されて、君への想いが止まらない。松浦船とは備前松浦製の船とある。楫の音が大きいので有名のようである。何かに恋をするのは若者だけの特権とは限らない。物に寄せ、旅に寄せ、もう一度想いを起こせるだろうか。川辺に咲く小さな花に春の訪れを感じるように。スポーツ選手の奮闘ぶりに心が躍るように。「よし、やるぞ。」と叫ぶまではいらないが、少しもらった勇気で、空を見上げて伸びをするくらいはできそうだ。無理して空元氣を見せることもない。じつとしているのも悪くない。長い人生のうちにとどまる日もあり、誰かを思つて止まらぬ日もあり。やはり人は、とどまっているように見えて、時の流れの中で必ずどこかに向かっているのかもしれないと思う。

「人は何年かすると、新陳代謝をする細胞については、すべて新しくなっている」という言葉を、以前聞いたことがある。そういえば、おなががすいた。まずは細胞レベルで新しくしていこうか。桜餅にいちご大福に草だんご。春と言えば、竹の子ご飯に山菜の天ぷら。「よし、買い物して帰ろう。」こうして食欲はじつとしていないのである。